

日本語教育専門家の養成に求められるもの

—「日本語教育実践研究（1）；わせだの森」の実践から—

池上 摩希子

要 旨

子どもの日本語教育に携わる専門家とはどのような人材をいうか、そして、どのようにすれば養成できるのか。本稿では「日本語教育実践研究（1）」の実践をひとつの事例として、養成・研修に求められているものは何か、考察を進めた。その結果、養成・研修としては、対象者が子どもかどうかに関わらず、理念の意識化を伴った具体的な実践が重要であると述べた。

キーワード

多様性 養成・研修 OJT方式 理念の意識化

1. はじめに—多様化への対応—

本稿では早稲田大学大学院日本語教育研究科（以下、日研）の科目である「日本語教育実践研究（1）」（以下、「実践研究（1）」）における実践を通して、子どもの日本語教育に携わる専門家を養成できる研修のあり方を考える。「実践研究（1）」では、履修生が授業活動を行う場を「にほんごわせだの森」（以下、「わせだの森」）と称し、履修生が設計して実際の活動を実施している。まず、筆者がこのようなスタイルで養成・研修としての「実践研究（1）」を行う理由について述べておきたい。筆者がこれまでに受けた日本語教育に関する養成や研修の主なもの、

①国立国語研究所で「日本語教育長期専門研修」を受講／1年

②大学院修士課程で主専攻として日本語教育を専攻／2年

である。この他にも、日本語教師として現場に携わりながら、短期や中期の研修をいくつか受けてきた。しかしながら、自身が最も影響を受けたのは①の直後から就いた教育実務であり、それは中国帰国者定着促進センター¹（以下、「帰国者センター」）での実践である。

中国帰国者に対する支援と日本語教育の詳細は紙幅の関係上、ここでは割愛するが、1980年代に入り、帰国者が日本に帯同した二世のうちの学齢期の子どもたちの就学によって、「中国帰国児童生徒」という存在が学校教育や日本語教育の領域で徐々に認識されるようになったことは、年少者に対する日本語教育について考察するうえで重要な点である。帰国者センターでは、帰国者とその家族が学習者となる。筆者も、70代の一世から幼児の三世までを対象に日本語教育を行っていた。「多様性」と一言ではいえないほどの学習者特性と個人的要因を前に、何をどのように教えることが適切かと日々、教育実践を繰

り返していた。

帰国者センターでのおよそ20年間の試行錯誤から、筆者が感得したことがふたつある。ひとつは、どんな学習者にとっても、必要なのは「学習を継続していくための自信と意欲」であること。そして、多様な学習者それぞれが自信と意欲をもつためには、教え方やスキルを越えて「「今、ここ」にとどまらず、それを越える視野をもった教育」を展開するという。多様化する日本語教育の多様な文脈に対応できる教員を養成するためには、このような理念と向き合う実践が必要なのではないか。この考えが「実践研究 (1)」での試みに繋がっている。

2. 「わせだの森」の実践概要

2.1 どのような実践か

こうした考えをもとに、2006年度から「実践研究 (1)」を開講した。実践研究科目としての「実践研究 (1)」の概要は池上 (2020) にあるが、さらに要点をまとめると以下のようになる。

- ・「実践についての授業」の時間と「実習としての実践」の時間で構成され、後者の実践を「わせだの森」と称している。
- ・実習をするための教室は準備されておらず、「わせだの森」を創るところから始める。
- ・受講生は教室をデザインし、目標を立てて活動を実施し、評価とフィードバックを行う力を身につける。

毎学期、受講生の人数や実践のデザインによって調整が入るが、プロトタイプとしてのシラバスは図1のようなものである。この他、授業時間外に、活動案の検討や活動のリハーサルも行われる。そして、実践の後には必ず1時間程度の振り返りを行い、授業の一環として教員も参加し記録を残している。

第1回	ガイダンス
第2回	実践の準備・教室デザイン (目標設定、環境作り等)
第3回	実践の準備・教室デザイン (環境作り、学習者の募集準備等)
第4回	実践の準備・教室デザイン (学習者の募集等)
第5回～第14回	今週の実践の振り返りと次週の実践の準備
第15回	全体の振り返り

図1 シラバス (プロトタイプ)

「わせだの森」の活動は授業とは別の時間に行われる。その曜日、時間帯、回数、参加人数等は期によって異なるが、一学期に7～10回行う例が多かった。「わせだの森」では学習者を参加者と称することが多い。そして、その属性やレベルに条件を設けて募集を行うことはあまりない。受講生たちは「教室から固定的な関係性は排除できるか」「共生を目指した教室は創れるか」、このような問いをもち、答えを探ろうと「わせだの森」で実践を行う。その結果、留学生だけではなく地域の人々や子どもたち、国籍や母語も含め多

様な属性をもつ人々が参加している。活動のおよその流れは

開始⇒アイスブレイク⇒対話活動(全体/グループ)⇒全体共有

といったもので、対面時には90分、オンラインでは60分で実施している²。

2.2 何を指すか

「わせだの森」の実践を通して、どのような人材を育むことを目指しているのか。「実践研究(1)」のオリエンテーションで配布する資料には「この実践研究を履修することで得られること、得て欲しいこと」として、以下を記載している。

どんな活動を組むかによって受講生に求められる知識と技能は異なるが、どんな活動を組んでも、「状況分析」⇒「目標設定」⇒「実施」⇒「評価」(⇒フィードバック)というコースデザインの基本的な流れを押さえ、実施することが求められる。実践研究(1)では、この流れを明確に意識した上で具体的な作業をこなしていく必要があるため、個々の技能のアップも大切ではあるが、むしろ、コースデザインを体験し実施することで自分の考える「日本語教育」を具現化する力を伸ばしたい。

授業シラバスにもほぼ同様の内容を「到達目標」として記載してあり、授業での対話も

- 1) 自分の持つ教育理念に基づいて、自分の考える「教室」を創ること
- 2) コースデザインの基本的な流れを押さえて、上記を実施すること
- 3) 上記を実施することで、自分の考える「日本語教育」を具現化する力を伸ばすこと

この3点を軸に展開している。これは、「多様性に向き合える力」を育むためであるが、こうした力を身に付けるには、知識と技術をひとつひとつ積み上げていく方法だけでは十分ではない。教員研修においても、日常的な教育実践と研修とを関連づけるための方途のひとつとしてOJT方式³がある。「わせだの森」の実践でも、実際に教室を創り、コースデザインの過程を全て実行することによって、知識や技術を状況に合わせて再考して運用できるようになることを目指す。学習者や環境条件によって必要とされる知識や技術は変化するのであるからこそ、自分の持つ教育理念を自分の考える日本語教育として具現化する必要があると考える。

3. 日本語教育の専門家とは

以上のように、「わせだの森」は子どもを対象として特化した実践ではない。しかし、「自信と意欲」「今、ここにとどまらない」の2点は、子どもの日本語教育に携わる専門家にとっても重要なのではないか。「わせだの森」の実践を続けながら考えてきたことである。

3.1 専門家に求められるもの

子どもの日本語教育を行う主体としては、日本語教師や学校の教員、また地域での支援者などがあげられる。立場はどうであれ、その主体はどうあるべきか。日本語教育学会が文化庁から受託した事業として「日本語教育人材の研修プログラム普及事業児童生徒【初

任]」がある。2020年度の「子どものための日本語教育研修－子ども初任コース／講師育成コース」募集案内によれば、その目的として、以下のように述べられている。

外国人児童生徒等の背景や言語・学習環境、各地の受入れ・指導体制を理解して、キャリア支援や社会参加という視点をもって子どもたちの生活・学習に関連付けて日本語を教えられ、マイノリティである子どもたちのエスニシティやアイデンティティを考慮した教育・支援を行うことができる人材を育成する。

(<http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/09/bunka-shonin.pdf>)

これを見れば、子どもの日本語教育が「言語としての日本語を教える」という狭義のものではないことは明確であろう。子どもの日本語教育に携わるものには、子どもたちの背景や地域の受け入れ体制を理解すること、長期的なスパンで日本語の必要性を考えて教えること、なにより、エスニシティやアイデンティティを考慮した支援ができることが求められている。

さらに川上（2020）は、子どもたちの「ことば」と「ことばの力」をどのように捉えるか、ひいては、子どもたちが複数言語を使用して生きることを、私たちはどう捉えるかを問うている。そのうえで、複言語複文化能力を前提とすれば、日本語教育の実践は単に日本語だけを教えるものにとどまらないことが明確に主張されている。ここから考えて、子どもの日本語教育に携わる専門家は「単に日本語を効率的に教える日本語教師ではなく、子どもが複数言語環境に生きることを理解し、多様な言語資源を活用して日々のコミュニケーション活動を行い、「移動する子ども」という経験と記憶と向き合いながら成長する子どもの生を捉えられる教員」（p.39）であるとされる。

3.2 専門家養成のために

こうした専門家を養成するためには、どのような研修が必要か。私たちが考えなければならぬのは研修・養成を行う日々の実践において、何ができるかということである。「わせだの森」の実践では、「教える／教えられる」関係を越えようと（池上・い・小島2017）実践者も含めた参加者一人ひとりが声を届けられる場を作る。「自信と意欲」はコミュニケーションを行う自信と意欲から育てていく。そして、活動が終わった後も参加者が他の参加者や日本語そのものとなつながら育つような仕掛けを考える。「今、ここを越える」つながりが生まれる。

これらは、実際に教室を創るプロセスで知識や技術を運用しながら行ってきたことである。科目としての「実践研究（1）」にはサブタイトルがついている。「自分で創って自分で動かす教室：「にほんご わせだの森」の実践」がそれで、OJT方式を表しているともいえよう。3.1で述べた子どもの日本語教育に携わる専門家に求められるものを見ると、子どもたちのことばの状況の捉え方によって育まれる「自信と意欲」があり、ライフコースを視野に入れる教育が「今、ここを越える」ものとなるとわかる。この重なりを考えれば、専門家を養成する研修は学習者が大人であれ子どもであれ、自らの理念を意識化したうえでの具体的な実践をコアにおいたものとなるのではないか。

4. おわりに一次につながる実践—

養成・研修の結果や効果は、コースが修了したそのときにわかるものではないだろう。また、日本語教育の専門家とされる存在は教壇に立つ教師だけではない。子どもに関わる専門家も同様であろう。であれば、養成・研修が目指すことの範囲についても検討していく必要がある。「実践研究 (1)」においても、オリエンテーション時に「日研修後、日本語教師として進んでいくにあたり、この授業がどのように役立つのか」を明示している。「わせだの森」に関しては、次につながる実践として「森で育まれた卒業生のいま」⁴を紹介して本稿を終えたい。小さな実践ではあるが、修了生一人ひとりが日本語教育に関わっていく自信と意欲を持ち、「わせだの森」を越えて自らの実践を行っていることがわかるであろう。

注

- 1 帰国者センターは2016年3月末をもって閉所となり、事業は中国帰国者支援・交流センター (<https://www.sien-center.or.jp/>) に統合された。(2021年2月28日取得)
- 2 具体的な活動内容はホームページ (<http://www.gsjal.jp/ikegami/mori.html>) を参照のこと。(2021年2月28日取得) また、上田 (2018) でも例が参照できる。
- 3 OJT (On the Job Training) は本来、企業等職場で従業員に実務を通して職業訓練を行うことをいう。教員研修においては、勤務校等で職務遂行に関連したことを研修とすることになる。教員の資質能力を向上させるためには、校外研修以外にも学校内において同僚教員とともにOJTを通じて日常的に学び合う校内研修が必要とされている (文部科学省、2015)。
- 4 「森で育まれた卒業生のいま」 <http://gsjal.jp/ikegami/morinow.html> (2021年2月28日取得)

参考文献

- 池上摩希子 (2009) 「『教室』の解体が創出するもの—「にほんご わせだの森」の実践から考える対話の可能性」水谷修監修・衣川隆生、小林ミナ編著『日本語教育の過去・現在・未来 第3巻 教室』第3部 第4章、凡人社、pp.161-179
- 池上摩希子・いじょんみ・小島佳子 (2017) 「教える／教えられる」関係を越える教室」川上郁雄 (編) 『公共日本語教育学—社会をつくる日本語教育』くろしお出版、pp.165-170
- 池上摩希子 (2020) 「実践報告：「日本語教育実践研究 (1)」」早稲田日本語教育学29号、pp.37-42、早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 上田桂子 (2018) 「「わたしのことば」を見つめる活動—「にほんご わせだの森」の事例から—」早稲田日本語教育学25号、pp.107-112、早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 川上郁雄 (2020) 「「ことばの力」と「ことばの教育」—子どもの日本語教育のあり方を問う」『リテラシー』23巻、pp.33-40、くろしお出版 <http://literacies.9640.jp/dat/litera23-33.pdf> (2021年2月28日取得)
- 文化庁文化審議会国語分科会 (2019) 『日本語教育人材の研修の在り方について (報告)』文化庁
- 文部科学省 (2015) 『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について (中間まとめ)』文部科学省 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/houkoku/1360150.htm (2021年2月28日取得)

(いけがみ まきこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科)